

都留市史

通史編

谷村町の大火

長い戦争がやっと終わったけれど、まだ社会混乱は続いており、インフレも激しさを増していた。谷村町などもやっと将来の見通しに少し光が差し込んできたかな、という昭和二十四年に町の大方を焼き尽くす大火にあってしまうという不幸に直面した。

昭和二十四年五月一日のまだ明けやらぬ午前三時に発した火災は、四時間に渡って火元の下町から横町、高尾町、田町、そして中町の一部を焼き尽くしたのである（近現代五八六）。全焼は三一八世帯、半焼二〇世帯、罹災人口一五七一人で、面積は約二万七〇〇〇余坪になる。

この大火で重軽傷者はわずか一五人のみであった。また全焼した主な建物としては、都留病院、須藤病院、専



谷村町の大火

念寺、西涼寺、東漸寺、谷村座、谷村映画劇場、桂川館、弘三館、山本館など三旅館、飯島染色工場、民生化学製油工場、志村、花富士機械器具店、奥、向山商店、国井雜貨店、長田薬局、織物協同組合事務所など、著名な商店、工場、事務所の多数が被害を受けている。

火災の原因は、火元の燃糸業者が作業に使用していた三馬力電動機の過熱によって発火して居宅全体に広がったのである。消火は、谷村消防署の自動車ポンプ二台をはじめ、隣接町村はいうまでもなく、遠く北都留郡各村からの自動ポンプ車一三台、腕用ポンプ二六台、消防員四〇〇〇名が当たったが、拡大していった。大火になった原因の一つに降雨がすくなく大気が乾燥気味であったこと、また当夜は南西より北方への烈風があり、風速は一五メートルに達していた。さらにこの地域には建物が比較的小さい構造のものが多く、道路が狭く、消火が容易でなかったために火は広がってしまったのである。

火が鎮まると同時に、谷村町では災害援助委員会を設け、町議会議員や一般住民から委員を選任し、救助対策を進めることになった。隣接する各地からの救援物資はいうまでもなく、国や県からも人員や物資が到着した。復興への着手として大火の翌日には戦前から画定されていた都市計画を実現するチャンスとして、横町の国道や高尾町の道路などの幅員拡張を即決し、さらに罹災家屋の建築資金を貸し付けることなども決められている。谷村町議会は、五月一七日に復興資金一七八〇万円の前算案を提出している。その主要なものは一〇〇戸分の住宅

建築資金として一五〇〇万円、残りが道路関係の土地買収費、工事費、設計監督費などである。

長かった戦争も終わって、これから敗戦の痛手から立ち直ろうとした時に起こった谷村町の大火は、「甲府市に亘ぐ谷村の伝統を誇った繁華街も一瞬にして灰塵と帰した」と谷村町の公文書に記されているとおり、戦前からの景観を失ってしまったといわれるほどの打撃を与えたのである。